

---

# 私たちの物語

麻生海里

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私たちの物語

### 【著者名】

NZマーク

NZ5320

### 【作者名】

麻生海里

### 【あらすじ】

ひとつのお会いにひとつのお話がある。  
これは私たちのお会いの話。

奈緒とカイはある夜出会いお互いひかれあう。

それはとても切ない物語。

カイの忘れようとしてもできない過去。  
カイを忘れようとしてもできない奈緒。

やがて二人はお互の未来を見つける。

「なお、今夜空いてる？」

昼休み終了間際の社員食堂で友人がBセットランチを受け取りながら、私の肘をつつつく。

「危ないじゃない。…………空いているけど？」

彼に振られた私は今夜以外もずっと予定が空いている。

窓側の席に並んで座る。春の暖かい日差しで気持ちがいい。

「よかつた。彼女がね一緒に飲みましょうって言っているの。よかつたらまたあのお店に行かない？」

友人の口からでた「彼氏」ではなく「彼女」という言葉にから揚げを落としそうになる。

慌ててご飯の上にから揚げを避難させて、周りの人を気にしながらお茶を一口飲む。

幸いなことに時間が遅いので人もまばらだった。ほっとしながら声をひそめる。

「『彼氏』はどうしたのよ」

「そんなの別れたわよ。私が今好きなのはあいつじゃなくて『彼女』だもの」

「その人ってこの間の？」

「そこ。あの夜に色々話をしてた、なんか合いつかていうか価値觀が合つていうか…………そのまま別の場所で飲みなおすてね…………」

後の言葉を濁す友人。心なしか顔も赤い。つられて私も顔が熱くなる。

「まさか…………しちゃったの？」

肯定なのか友人はあじフライを食べる。

「ねえ、どうなの？」

お昼ご飯どころじゃない。気になつて箸を置くと観念したのか友人も箸を置いた。

「…………だつてね。素敵なんだもの、仕方がないじゃない？」

「それって、男よりも女のほうがよかつたってことなの？ あんた女もいける口だつたわけ？」

「もう、なおったら。違うわよ？ 女が好きなんじゃなくて、『彼女』が好きなの」

幸せそうな友人の笑顔に、私はそれ以上何も言えなかつた。

人の気持ちはその人それぞれ。

出しあけた溜息をから揚げを口に入れることで抑えた。

「お願い、なお。一緒に彼女に会つてくれない？ まだ二人きりだと緊張しちゃうの」

ううん。またあのお店に行つたら、見たくない光景を見てしまふような気がするけど……。

それに会いたくない人にも会つてしまいそうだし。

自分の気持ちとは反対に心臓がドキドキしてしまう。

私が振られたとき、友人は真夜中だったのにもかかわらず、タクシーで駆けつけてくれた。

一晩中励ましてくれたつづけ。

そんな友人に感謝の気持ちでお返しするだけ。

ただそれだけだよね。

別にあの人には会いに行くわけじゃないし……。

「わかつた、付き合つてあげましよう」

見え隠れする気持ち。

不安と期待。

「ありがとう！ ビール一杯おごるね」

友人は私のから揚げを盗みながらにっこりと笑つた。

## ■ 総（後書き）

1部の続きです。

1部のおかしなところで前回ぶつかりてしましましたへへ

まだまだこのサイトの使い方がわからていません。

ご不便をおかけしてしまって申し訳ありませんでした。

## プロローグ

私は時々考える。

小指には運命の人とつながる赤い糸があるという。  
でも、一体何人の人が運命の赤い糸に気が付き  
糸を辿り運命の人と出会えるのだろうか・・・・・・。

運命の赤い糸を自ら切つてしまつた人は、もう一度と運命の人と  
はめぐり逢えないのだろうか・・・・・・。

この細く長い小指。

貴方の赤い糸は、誰と繋がつているのだろう・・・・・・・・。

それとも誰とも繋がつておらず、

貴方は一生女と女の間を渡り歩き、独りで命を終えていくのだろうか。

私は貴方の幸せを願いながら  
貴方の孤独を願う。

絡ませた貴方の白い指に  
私はそつとキスをする・・・・・・。

1 - 1 なお

つるさい。

周りの人々の話声。

誰がなにを話しているのか、全然聞き取れない。

音楽も耳にうるさく響いてくる。

音楽がうるさいからみんなが大声で話すんじゃない。  
さつきからずつと立っているからか、足も痛い。

なんで椅子がある席が全部埋まっているのよ。

こんなことならがんばって履きなれないヒールを履いてくるんじ  
やなかつた。

私はこのバーにきた事をお店に入つて5分で後悔した。

いくら男に振られて落ち込んでいる私を慰めようとしても、ここ  
ははつきり言つてしまえばあんまりだと思つ。

隣でキスをし始めた恋人たちにギョッとしながら、ここに連れて  
きた張本人を探す。

友人はちゃっかりカウンター脇で、私の知らない人と楽しそうに  
話していた。

まんざらでもない顔しちゃつて、なによ。

女の人に口説かれているのに、そんなに嬉しいの?  
この変態つ！

先に帰ることを友人に告げるため、キスしている隣の一人の間を  
わざと通つてカウンター脇に向かう。

キスしている片方の女が私にウインクをして、また恋人とキスを  
する。

腕の中に恋人を抱きながらよくやるわね・・・・・。

それとも恋人ではないのかしら。

友人の処に行く気にもなれず、そのままその女に中指を突き立て  
ながら出入り口に急ぐ。

友人には後でメールを送つておけばいい。

それに彼女は私が先に帰つても、それを気にするような状態じゃ  
ないだろう。

ドアの取っ手に手をかけようとした瞬間、外からドアが開き桜の花びらと一緒に風が入ってきた。

そして彼女が入ってきた。

外は雨が降り出していて、彼女の短い髪を濡らしていた。

両隣にいる女の子よりも背が高く、ずっときれいな笑顔でドアの前に立っている私を見た。

私もただ彼女を見ていた。

白いシャツから覗く鎖骨がきれいだ・・・・・・と思つた。

慌てて開けてあるドアから出る。

一人の間には店の敷居がある。それだけでなぜかほつとした。

「もう、帰るの？」

私に言つているのかわからず、私は後ろを振り返ったが私以外にはその人しかいなかつた。

「え・・・・・・と」

私が口を開く前に彼女の細い指が私に伸びてきた。

髪にそつと触れる。

わたしは思わず目をつぶると、くすっと彼女が笑つた。

「驚かせてごめん。でもほら、桜の花びらがついてた」

耳元で彼女の少し女性としては低くハスキーな声が聞こえる。

その声は私に心地よく響いてくる。

指が私の髪をなで、頬をなでて離れていく。

その指を私は未練がましく見てしまう。

「はい、これ」

私の手に薄いピンクの花びらをのせ、彼女は女の子たちとお店に戻つていく。

心臓がドキドキする。

彼女を追つて店に逆戻りしないように、私は駅まで走った。

おかしい。

あの日からずっと彼女のことを考えてしまつ。

彼女の指が、声が私の中から消えない。

もう一度会いたいと思つてしまつ。

それはなぜなんだろう・・・・・。

女の私からみてもきれいな人だつたから?

彼女が女の子を連れていったから、興味本位なの?

きつとそうなんだろう。

私はまだ自分に芽生えた気持ちに無理やり理由をつけていく。

気がつきたくない、知りたくない。

なぜなら、この気持ちは危険すぎる・・・・・。

## 雨（後書き）

小説を書くのは初めてです。  
いささか緊張をしております。  
つたない文章の中に私の気持ちを込めました。  
これから始まるなあとカイの一人の物語を私と一緒に見ていただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6532o/>

---

私たちの物語

2010年11月10日16時55分発行